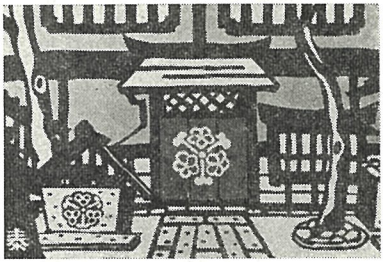

随想

芸術と商業主義

吉岡健二郎

例年は八月中旬に行われていた日宣美の大阪展が、今年は少し遅れて九月上旬、天満橋の百貨店で開かれた。日宣美展とはいうまでもなくグラフィック・デザイナーたちの集りである日本宣伝美術会の展覧会である。これに入選したり、会員になったりすることは、ポスター作家として社会的に承認されるということだから、グラフィック・デザイナー志望の人々は大きな関心を持っている。

展覧会が入場無料のせいもあるが、会場は肩と肩とが触れ合わんばかりの混雑ぶりで、おまけに二十歳前後の若い人が圧倒的に多いから、不惑をすぎた人間がまぎれ込むと場違いの感じがして惑ってしまうほどである。これが美術館や博物館で開かれる展覧会となると、新聞社主催の特別展などは例外として、事情は全く逆である。入場者は数えるばかりだし、その平均年齢もあまり低いとは思われない。

日宣美展と同じ頃、京都の国立近代美術館では「異色の近代画家たち」という企画展が開かれていた。関根正二・長谷川利行・鬱光など存命中にはそれほど世間的にもてはやされることがなかったのに、死後次第にその輝きが増してきた人たちの展覧会であった。しかしこちらの方は、広く静かな会場にちらほらと人影をみるだけだった。入場無料だったとしても事情はさして変りがないであろう。むしろ「異色の……」会場に人々がつめかけ、日宣美展の方に閑古鳥が鳴いたとしたら、それこそ異常事態というべきである。

日宣美展の世界は我われの日常生活の次元に密着している。一日のうちでポスターやテレビのコマーシャルを一度もみない日など、まず皆無に近い。広告の載っていない新聞などというものもない。我われは三度の食事を摂るのと同じ調子でそれらをみている。日宣美展の世界は、あまり理解する努力がいらないようにできている。ということは作る側の人が努力しないということではない。むしろ作者は誰に何をいかに訴えるかという点に日夜努力している。しかもその努力の結果たるポスターは、商品なり、催しものなりを人々に伝達するための手段であって、ポスターを自己目的にすることは実際上不可能である。もしそんなことをしたら、たちまちスポンサーがつかなくなってしまう。

今の世の中では何もかも商品化される。芸術とても例外ではない。芸術は実際的な必要から生まれるという説からすれば、グラフィック・デザインは、新しい芸術、つまり商業主義時代の代表的芸術ということ

になるだろう。時代の流れに敏感な若者がとびついても不思議はない。

ただし芸術という世界は、商業主義を絶対に拒絶するものが、むしろ一番商業主義に適合し、すぐれた商品になるという逆説的な一面をもつ事を、忘れてはならないと思う。その事は「異色の近代画家たち」が何よりも雄弁に語っていると思う。

（文学部教授・美学史）

シカゴでの思い出

浦谷　道三

戦前、戦中、戦後と七年余住みなれたシカゴでの思い出は尽きない。忘れられない事件が数多くあり、忘れられない人がたくさんいたものである。その内の二つ三つを書きしるして随想としたい。

FBI局員との出会い——

有名なFBIすなわち米国の連邦検察局の局員二人が当時文字通り敵国人であった私の部屋をノックしてはいって来たのは昭和十九年六月十二日（月）の事であった。シカゴ神学校の寄宿舎の一室であった。約二時間半にわたり室内にある私物を徹底的に検閲、その中で祖国の先輩、友人から餞別に貰った署名いりの国旗をはじめ、軍刀づきの人物写真、教育勅語の英文の写し等等役らの神経を刺激するような物を中箱三つにつめ込み、「必要な時にはまた電話する」と言い残して去って行った姿はいまだに忘れられない。その後、同月十七日、二十二日と二回にわたり召喚され、色々な尋問にあずかった。三時間の長きにわたるもので、質問の中で、㈠日本で学校が火事の場合何を最初に持ち出すかと尋ねられたので、「ご真影、国旗、それに教育勅語の巻物」と答えたら、二人はちょっと驚いたようであった。何しろ愛国精神につらなるものであり、当時ご真影と言われた天皇皇后両陛下の写真を除いては、火急の場合、直ちに持ち出す二つのものを持っていたからである。㈡また、日本政府から送金を受けた事はないか、日本政府関係の者に手紙を出した事はないか等の質問を矢つぎばやに投げかけて鋭く迫ってきたが、結局第三回

蔦の炎

麻田　冲人

〈昭8大経卒・会社重役〉

蔦の炎厓に一縷の血を滴らす
サルビアの鮮烈朝の牛乳欲る
蟷螂の分別風に逆はず
蟷螂の見えざる風に身を構え
秋暑し喪章の蝶の翅も萎え
秋風や腕の喪章の空解けて
怺ふ術なく花零す雨の萩
萩痩せて花の重さを持て余す
声のなき叫喚風に耐えて萩
未晒のパン香ぐはしき今朝の秋
朴落葉地に届くとき力抜き
金輪際巌に縋りて蔦枯るゝ
水上バス子のバスケット蟬鳴かせ

目に呼び出された日（八月二十六日）の午後すべて潔白であったと言うので、中箱三つに持ち出したもの一切をかえしてくれた。当然の事とはいえ淡々とした公平な取扱いに心あたたまるものがあった。

真の愛国者的絶叫――

それは確か昭和二十年八月七日すなわち広島市に人類史上最初の原子爆弾が投下された翌日の事であった。シカゴ大学のロックフェラー記念礼拝堂で同大学総長ハッチンス氏は大学生や一般有志を前に「アメリカが一般市民、非戦闘員のいる大都市の真中に原子爆弾を投下したのはまことに遺憾である。むしろ日本の山岳地帯に落してその偉力を見せるべきであった」と暗々裡にその非人道的な行為に対する自国の猛省を促したが、それは実に忘れられない愛国の士の大講演であった。

義憤に燃える印度の友――

ある夜ドミトリーの隣室にいた印度の友シンハム氏が英文の手紙を見せてくれた。その手紙は、言わば「拝啓ルーズベルト大統領様」ともいうべきもので、文中「いやしくも大国の責任者ともあろう者が、軽べつの意を持つ Jap〈日本人のこと〉というような言葉を絶対用うべきない」と義憤をこめて、去る日なされた大統領の演説に対する忠言を書きしるしていたが、忘れられない手紙であった。

（昭13大神卒・近江兄弟社学園長）

土の良さ

藪内　尚弥

今年の夏、私は奥信濃に旅する機会を得た。或る女子大学の茶道部の合宿の講師として。旅行前、学生から民宿で物凄く田舎ですから覚悟してついてきて下さいと言われていたが、到着してみて驚いた。村の人人の素朴な人柄、俗化していない接待の仕方、日本にもまだこんなところがあるのかと。

とにかく、食事の内容は良いし、学生に対してわが子のように宿の人々が実に暖かく接してくださるのは全くありがたかった。茶道部の合宿は意外にきびしく、朝六時起床、八時から十一時半まで稽古、午後も一時から五時まで稽古、夕食の後は秋に茶会をするお寺の歴史の勉強等、全く一日中正座をしていなければいけないスケジュールである。しかし部員は一言の文句も言わずよく頑張った。秋にはきっと良い結果が出ると思う。

夕暮れのひと時、私は、まわりの土地を歩いてみた。どこにも舗装されたところはなく、山道にさしかかるにつれて道端には、われもこう、かやつり草、女郎花、水引草、りんどう等京都では珍重される草花がいとも無造作にさきほこっている。何の手入れもされずに、道で行き会う村人はわれわれに気軽に「こんにちわ」と挨拶を交していく。牛にリヤカーを引かせ、それにのって山を登ってくる百姓さんがいた。われわれとすれちがう時、牛がびっくりして動かなくなった。すると百姓さんいわく「お前らがとおるから牛ぁたまげてうごかねえ」と。わたしは一日でこの素朴な土地が気に入ってしまった。と同時にわれわれの住んでいる古都京都が文明の嵐にふきまくられ、本来もっている姿を失いつつあるかを痛切に感じた。

落ちる林檎

宝　譲

〈昭4大英卒・無職〉

農村の小道はびしょびしょに濡れ
林檎園にはいたるところに
林檎が落ちていた。
稲は黄色に倒れ伏して
稗がはびこっている。
陰鬱な雑草の小道をふんでゆくと
小雨に濡れて
阿武隈川がひっそり流れている。

米寿の老女の住む農家が
雨の中にびっしり濡れている。
このひとは老耄の忘却の中に
赤い着物で坐っている。

村の話はつきることもなく
生活の苦渋のにじむ顔で

村びとは働らいて生きて

かくて
忘却の中に流れてゆく　老残の
赤い着物に
何のためらいがあろう。
村びとの坐る畳の上に
ひそやかにうづくまる平安。

雨が降りつづいている
農村をびっしり濡らして——。
小雨にぬれて阿武隈は流れつづける。
小雨にぬれて林檎は落ちつづける。

落ちてゆく赤い林檎の実よ。

いかに時代に歩調を合せるためとは言え、余りにも古都の自然、また歴史が、産業化等という名のもとに荒されているが、もっと京都の匂いののこった箇所が守られていいのではないかと。一つの例としていえることに余りにも山道などを舗装しすぎはしないか、これによって雨水が地下に吸収されず、地下水が少なくなり、樹木は衰える、井戸水は出なくなる等の障害が起こるのではないだろうか。言いかえればもっと土というものにわれわれが関心をもっていいのではないだろうか。幼ない頃、土でこねたまんじゅうでまっくろになりながら、外で遊んだことなど、こんな状景を説明しても判らない子供たちがもうじき出てくるのではないだろうかと。その反面三十代のものが二十年もすれば土のないアパート住いが味気なく、庭木の植えられる住宅が欲しくなるだろう。幸い、私は土がなくてはならぬ茶庭のあるところに住んでいる。また多くの方々が庭を眺め、心のうるおいを取り戻してをられる姿をよくみかける。この辺でもう一度土の良さを考えて、変に文化的になりすぎた不具のような人間

をつくらないように、お互いに後をふりむいてみよう。このままでは心にゆとりやうるおいのない人間ばかりの社会になりつつあるようだ。（昭34大経卒・茶道藪内流教授）

或る「同ヤン」の独り言

福田　哲雄

誰が言いだしたのか、「同ヤン」という呼称があった。中学の頃であったが、われわれをも含めて同志社の男子学生を指したものである。同志社の生徒さん、とか、学生さん、程度の意らしかった。同志社の内部・外部を問わず、「同ヤン」と呼ばれる場合には、一つの類型的なイメージがうかぶのは事実であった。お人好しで、善良で、どこかもう一つという頑張りがなく、当世流に言えば根性のない青少年学徒というところであろうか。他学ばかりでなく、同じ同志社内部でも、「同ヤン」というのは、良く言えば善良で、悪く言えば物足りない学生・生徒の象徴としていたようだし、その呼称の中に、多少の誇りと、若干の自嘲が同時に感じとられるようであった。

中学卒業と同時に、同志社とは縁が切れたつもりでいた僕が、数年前から同志社の教員兼精神医をやっていること自体、われながら首をかしげることがよくあるのに、昨年の夏は、思いがけずアーモスト（アモーストの方が発音的には正しいように思うが）カレッジを見た時には、因縁がましいものすら感じだしたものである。十余年ぶりに、講演と通訳をかねた数週間あまりのアメリカ一周旅行の途中、かつてワシントン大学の精神科に留学していた頃に知り合った東大の加藤某氏夫妻がボストン近郊の大学に赴任していたのを訪ねた。加藤氏が近郊をドライヴしてくれている時に出くわした、静かなたたずまいの学園、それがアモーストカレッジであった。中学の頃からよく口にしていながら、前回の四年半の留学中にも、アメリカのどこにあるのかも知らないままで帰ってきたくらいであるから、日頃の不勉強と心掛けの悪さをしみじみと嚙みしめたことであった。

アモーストを見たあと、旅程の関係もあってニューヨークに向う途中「同ヤン」など昔懐しい呼称にかこつけてとりとめもないことを追憶していたところ、「インクリ」という表現（呼称でもあろうが）を想い出した。中学生仲間のあいだで、「インチキ、クリスチャン」の省略形として盛んに使ったものである。「同ヤン」のような一片の甘さも「インクリ」にはなく、主としてクリスチャンの教師や学生・生徒に対する人格批判の響きが籠められていたようである。

昭和二十年の春、同志社を離れた僕が、再び学園の姿を見たのは約十数年後である。懐しさと、変貌した外観のための混乱とで、一瞬戸惑いしたことを記憶している。「同ヤン」も「インクリ」も、現在あまり耳にしないようである。政党そこのけの権力闘争や派閥争いが活発であるように見受ける同志社――同志社だけではないが――同志社の個性らしいものがなくなりつつあるのではないのかと心配したくもなる。「同ヤン」とか「インクリ」という、われわれにとっては善悪いずれにしろ同志社的な呼称や問題性は、流動する社会の中に、完全に解体されてしまうのであろうか。

「良心の全身に満つる」教職員や学生・生徒は、「同ヤン」でもなければ「インクリ」批判のように、学園自体のあり方をまず反省し、自己批判から出発すべき学究と人格淘冶の場としての学園を目指して沈潜することは、もう無いのであろうか。

（昭20中卒・文学部助教授・精神医・医博）

妙　齢

薬師川虹一

「一度お洗いなさいナ」と母に言われなければ、風呂に入っても滅多に頭も洗わない父が、最近、自分でいつのまにか亀の子タワシなど買って来て、気がむくとお墓を洗いにいっているらしい、と母が心配そうに電話をかけて来た。見たところ何もかも正反対な人間で、衝突の絶え間のない両親だが、しん底での絆は強く結ばれているものだ、とあたりまえのことながら、ふとほほえましい気持ちになった。と言っても、ことで夫婦の愛情について想いをめぐらすつもりはない。言いたい点は父の変化である。しかもこの変化がいたるところに起っていることなのだ。例えば私の住んでいる家からして、十年前に比べると部屋の数も、人間の数も増している。数だけじゃない、驚くべきは内容の変化なのだ。幼稚園では大きな声も出せない青白かった長女が、今じゃ体重四十数キロのタクマシさで、なみいる男の子を完全に圧倒している。その上、他所の学校まで会議だとかに出ていく委員様だから昔を知っている人たちがあきれるのも無理はない。そこへもってきて先月から、一人前の娘になったと言って威張っているから、父親たるものいささか娘がまぶしくなる時がある。ついこの間生れたような長男も、あっと言うまに二十インチの自転車で走り廻り、遠乗りに連れていっても仲々へこたれない。幼稚園へ行くのを嫌って泣いていたのが、バスの定期をふり廻して一人で出かけていく。一方友人たちはと見廻すと、腹を突き出して威勢よく商売の話しをしている旦那衆、何々部長とかで、私共には気も達くなるような給料を貰っている奴、これが昔、学徒動員で一諸に豆カスを食ってた奴か、と信じられない様子である。卒業している学生諸君もそうだ。言葉遣い、おじぎの仕方まですっかり大人になって、こっちが返辞に窮することもある。上下左右、どちらを見ても、何もかも変っていく様子がありありと目に映る。「時」の流れが私の周りで轟々とうず巻いている。

両親、妻に二人の子供、友人、同僚……全てが三十八歳という中途半端な妙な年齢の私の側を猛烈に流れている。台風の時の雲のように。すると、私はさしづめ、台風の目というところだ。そこだけ奇妙に空しく抜けている台風の目。「時」のエア・ポケット。それが三十八歳という妙な年齢の姿ではなかろうか。十年一日を絵に描いたように変らないこの真空の世界に漂よう台風の目は、周囲の変化に気をのまれて、呆然自失のまま、明日も又、生きているのだろう。

仕事と生活の雑事に追われ、三十八歳という自分の年齢の意味もわからぬままに動いている私が、フト自分の姿に気付くのは、一体、何歳の時なのだろう。

（昭27大英卒・立命館大学助教授）